

## 《入選》

### 水循環で未来を切り開く

大阪府 大阪府立水都国際中学校 3年

湯田<sup>ゆだ</sup> 礼<sup>れい</sup>

2025年、大阪・関西万博覧会に、世界の知恵と技術、そして思いが集結した。私は、幸運にも開催前の試行運転である、テストランに参加することができた。資源の活用技術や、新たなエネルギーの生産手段など、地球の最前線での取り組みを知り、感じる事ができた。世界の「本気」を目の当たりにしたのだ。ここで、少し考えてみてほしい。万博が開催される本当の意義はどこにあるのだろうか。なぜ世界は今、ここまで「本気」にならないといけないのだろうか。私にとって万博とは、地球に満ちるいのちを救うための、知恵の緊急交換会である。

中でも特に印象に残っているのはアクアポニックスの展示だ。アクアポニックスとは、水を循環利用する画期的な装置で、植物を育てる際に使った水を、魚の養殖にも再利用するというものだ。魚の排泄物は微生物によって分解され、植物にとって必要な栄養になるため、農業や化学肥料を必要としない。

当時、アクアポニックスを知らなかった私は強い感銘を受けた。なぜなら、私は水を使いきりの資源だと考えていたからだ。もちろん、浄水場などで川の水がきれいにされ、再利用されることは知っている。しかしそれはあくまで一部の水処理に過ぎず、「水は回して使う資源だ」というイメージにはいまいち繋がっていなかった。ましてや、水は回して使うべき資源であるという発想さえなかった。その点、アクアポニックスは、水を循環させるだけでなく、微生物の働きで栄養を生み出し、本来なら不要となる廃棄物も有効活用しているのだ。まさに水循環システムのお手本だと言えるだろう。このような水循環システムについて知ることは、水は循環させて使うものだ、というイメージを持つきっかけになるため、とても大切だと思う。

では、そのようなイメージを持つ必要性はあるのだろうか。もちろんあり、これが最も重要なことかもしれない。

「水の循環」を意識すべき理由として、ある衝撃的な事実が挙げられる。それは、我々が普段使用している生活用水が、人間の生活および産業における水使用量全体の1割程でしかないということだ。これは国連食糧農業機関によるデータで、残りの2割は工業用水、そして7割は農業用水として使われている。これは多くの人にとって意外な事実なのではないだろうか。よくニュースなどで節水の必要性が報じられることも多いが、それは我々が普段トイレやお風呂などに使っている水、生活用水に対しての話である。

もちろん、生活用水を節水することはとても大切であり、私たちが日常の中で手軽にできる取り組みだ。しかし、やはりそれだけでは水不足の根本的な解決にはならない。水不足の根本的な解決には、全体の7割を占める農業用水の節水が不可欠であるからだ。そのための装置が、先ほど紹介したアクアポニックスであり、そのために必要なイメージが「水の循環」なのだ。万博は、このことを伝えたかったがためにアクアポニックスを展示したのではないかと思う。そして、このメッセージを受け取って、未来に繋げていくことが我々若い世代の使命なのだと感じる。

具体的に、今の時代を生きる若い世代に求められることはなんだろうか。それは、意識しがちな生活用水のみならず、国際的な水不足問題の本質を知り、未来を変える準備をすることだ。私の場合、今回の万博に行き、水循環システムについて知ったことで、水不足問題の深刻さを実感し、解決に向かって強く行動したいと思うようになった。このように、「知らないことを知って感じる」ことは、将来の大きな変化の第一歩である。今を生きる我々が、今度は次のいのちを、そして未来を、「本気で」切り開く番であるのは明らかだ。